

## 順治二年（1645）の蘇州（3）

滝野 邦雄

### 五月二十二日

二十二日、向に呉江の舉人の潘爾彪の郡中に遷居する有り。<sup>ひとり</sup>一方術もて醫業を兼ねる者の李滴春と曰うを官に薦む。能く行兵（軍を指揮する）すと謂う。以て將と爲さんと欲し、翌日に登臺（役所に招く）し鉞を受けん（受鉞：兵權をあたえる）ことを擬す。群心 大いに駭く。李〔滴春〕の才略 恃むに足らず、輕舉（輕率な行動）もて挑釁（挑発する）して、揚州の覆轍（失敗した先例）を免れ難きを慮り、遂に衆を率いて潘〔爾彪〕・李〔滴春〕の二家を擊毀（毀壞）す。太尊（知府）の陳師泰 即ち朱もて撤兵を示し、以て衆心を安んず（『吳城日記』卷上・「乙酉（順治二年）五月二十二日」条・二〇五頁）。

（二十二日、呉江の舉人で蘇州城内に移り住んでいた潘爾彪という者がいた。潘爾彪は、方術師で医業も兼ねる李滴春という者を官庁の人たちに推薦した。軍隊をよく指揮でき、將軍にもなれるとってである。そして李滴春を將軍として、翌日に役所に招いて軍の指揮権を与えるように提案した。人々はおおいに驚いた。李滴春の才能が頼りにならず、輕率に挑発行動を取って、揚州の轍を踏むことを避けられないと考え、とうとう潘爾彪と李滴春の家を打ち壊した。蘇州知府の陳師泰は、撤兵を告示して民衆の心を安心させた）

蘇州城内に住んでいた呉江出身で崇禎九年（一六三六）の舉人の潘爾彪が、李滴春を軍官として推薦する。しかし、李滴春は無能で、揚州の轍を踏むことを恐れ、大騒動になったというのである。

『蘇城紀變』にも、同様の記事がある。ただし、十九日に掛けている。

〔五月〕十九日、孝廉の楊<sup>①</sup>惟斗と呉江の孝廉の潘爾彪 一の浙人李<sup>ママ</sup>滴春（『吳城日記』では「李滴春」）を郡守（知府）の陳<sup>ママ</sup>卿泰（陳師泰）に荐<sup>ママ</sup>（薦）めて謂う、其れ天文を習い、韜畧（『六韜』・『三略』の並稱。兵書を指す）を諳んず、と。首謀と爲して義兵を起こさんと欲す。百姓 淮揚（揚州）の轍を蹈まんことを恐れ、輒ち相い與に鼓譟（騒ぎ立てる）して、潘氏の廬を擊毀（毀壞）す。〔そして〕將に浙人を毆死せんとす。本府 急ぎ解兵（解除武装）すと出示（告示）し、以て之を慰め、乃ち止む。時に海内 主無く、人 自ら恣なるを得（『蘇城紀變』不分卷・一葉・國學保存會印『國粹叢書』第三集・光緒三十二年（一九〇六）發行）。

①共和甲戌（民國二十三年：1934年）印『明季史料叢書』第八冊所収影印鈔本や上海圖書館所藏鈔本『蘇城記變』は、「楊惟斗」の「惟」字を「維」字に作る。したがって、この「惟」字は「維」字の誤植でない。

いかと考えられる。

(十九日、孝廉の楊維斗(楊廷樞：字は維斗)と呉江の孝廉の潘爾彪が、浙江出身の李涵春を蘇州知府の陳師泰に、「天文のことを研究し、『六韜』・『三略』などの兵書に精通している」と言って推薦した。李涵春を押し立てて義兵を起こそうとしたのである。人々は、淮揚(揚州)の轍を蹈むことを恐れ、騒ぎ立てて一緒になって、潘爾彪の廬を打ち壊した。そして、李涵春を殴り殺そうとした。知府の役所は、急いで武装解除の告示を出し、人々を安心させたので、静まった。この時は、取り仕切る人がおらず、人々は勝手次第であった)

『蘇城紀變』では、潘爾彪と李涵春(李涵春)に加えて楊廷樞の名前が挙がっている。

楊廷樞(字は維斗。江蘇呉縣の人。明・萬曆二十三年(一五九五)～清・順治四年(一六四七)。崇禎十三年庚午科(一六四〇)の應天鄉試の解元)は、天啓六年の開讀の變の時の諸生のリーダーであり、應社を創設した蘇州の著名人であった<sup>補注)</sup>。そして、それまでに書いた文章や名声などから、必ず明王朝に忠節を尽くすであろうと見られていた人物である(拙稿「清初における楊廷樞について」(『経済理論』第382号)参照)。そのため、浙江山陰にいた祁彪佳も、蘇州で清政権から派遣された黃家鼎などが殺害されたという事件(このことは、次で検討する)を聞くと、すぐに楊廷樞がそのことに係わったのではないかと考えている。

[六月]初五日、……是の日、呉門 僞安撫の三人を殺すと聞く。蓋し呉門の守土する者は盡く逃れ、適たま楊龍友(楊文驄) 沿江巡撫[の官職]を以て至り、遂に楊孝廉維斗(楊廷樞)と同じく事を舉ぐるなり……(『祁忠敏公日記』乙酉日曆・「六月初五日」条・十七葉)。

順治二年六月五日(西暦：一六四五年六月二十八日)に蘇州で清政権に任命された安撫など三人(黃家鼎・黃家謨・參將の呉某)が殺害されたと聞く。そして、祁彪佳は、蘇州のいた地方官がすべて逃げ出してしまったところ、福王弘光政権で常鎮巡撫の職についていた楊文驄がやってきて、楊廷樞とともに事を挙げたのであろうという推測する、という。

いまのところ、『蘇城紀變』以外に楊廷樞が李涵春(李涵春)を推薦したと述べる資料が見当たらず、この事にかかわっていたかどうか分からない。

ただ、『呉城日記』に、

蘇郡の庚午(崇禎三年)南京の解元の楊廷樞 亦た居を光福に避く。彼は係れ名流、交游殊に廣し。湖海の屯聚する者 明朝を興復するを以て辭と爲す。楊君(楊廷樞) 書札を潜通(密かに通じる)す。事は亦た之れ有り(『呉城日記』卷中・二三〇頁)。

(蘇州の崇禎三年庚午科(一六四〇)應天鄉試の解元の楊廷樞もまた、光福<sup>①</sup>(鄧尉山)に避難した。楊廷樞は名士であり、交友関係が殊のほかひろかった。湖畔や沿海部に集結していた者たちは、明朝の復興をスローガンとしていた。楊廷樞は、そうした人たちとひそかに手紙のやりとりをしていた。そうしたことも、またあったのであろう)

①乾隆『吳江縣志』（卷之三十三・人物十三・寓賢・明・「楊廷樞」条）によれば、光福にある鄧尉山。とある。福王弘光政権が崩壊してから、蘇州城の西の太湖の側の光福（鄧尉山）に難を避けていたものの、復明運動にかかわっていた人たちと書簡を通じていたという。

楊廷樞がいつ頃に鄧尉山に避難したのか、いまのところははっきりしない。しかし、葉紹袁（字は仲韶，号は粟庵・天寥道人。江蘇吳江の人。明・萬曆十七年（一五八九）～順治五年（一六四八）。天啓五年乙丑科（一六二五）三甲四十六名の進士）の『湖隱外史』には、

……乙酉の變ありて、即ち居を〔吳江の〕蘆墟に避く。後に眞珠塢（鄧尉山の西南）の山中に入る。田衣を帔とし、楸壠を廬として、焉に棲む……（『湖隱外史』一卷・殉難・「楊廷樞」条）。

とあり、まず吳江の蘆墟に避難し、続いて眞珠塢（鄧尉山の西南）の山中に赴いたという。また、『甲行日注』には、順治三年十一月五日以降になって楊廷樞の名前が記されるようになるので、順治三年十一月五日以後には、鄧尉山に滞在していたと推測できる。

なお、『吳城日記』によれば、この鄧尉山一帯は蘇州の人たちの避難場所となっていたようである。

申（順治元年／崇禎十七年：一六四四年）・酉（順治二年／弘光元年：一六四五年）の變革（王朝の交代）より、人咸な居郷を以て便と爲す。光福〔山〕・元（玄）墓〔山〕<sup>①</sup>等の處ト居（居住を選び定める）する、寄迹（仮住まい）する者 貨を挾みて往く。寇盜多く劫掠（掠奪）を行なう。郷村 復た寧ならざるを苦しむ（『吳城日記』巻中・「順治四年」条・二三〇頁・江蘇古籍出版社・一九九九年刊）。

①光福は、蘇州城の西南の太湖のそばの山々が連なる一帯をいう。そのなかのひとつの山を光福山（一名は萬峰山）という。この山の北峰を「鄧尉山」、南峰を「元（玄）墓山」と呼ぶ。

（順治元年（崇禎十七年：一六四四年）・順治二年（弘光元年：一六四五年）に王朝の交代があつてから、人々はみな農村暮らしを適切だと考えた。蘇州近郊の光福・元（玄）墓などの場所は、住居を選び定める者や、仮住まいをする者が、財産をかかえて行った。そのため、盜賊は掠奪を行なうことが多かった。農村も秩序が保たれず平穩でないことを苦しんだ）

潘爾彪は、字は京慧，吳江の人で、崇禎九年丙子科（一六三六）の舉人である。乾隆『蘇州府志』によると（康熙『蘇州府志』には記録されない）、潘爾彪は、吳易（字は日生，号は朔清。江蘇吳江の人。崇禎九年丙子科（一六三六）の舉人。崇禎十六年癸未科（一六四三）三甲一百六十三名の進士）・孫兆奎（字は君昌，江蘇吳江の人。？～順治二年（一六四五）。崇禎九年（一六三六）の舉人）などの清朝に対する抵抗運動<sup>1)</sup>の軍に加わったものの病気のため従軍できず、亡くなったと記されている。

潘爾彪，字は京慧，丙子（崇禎九年（一六三六）丙子科）の舉人なり。常に吳易（易）・孫兆奎の軍中に在り。後、病を以て従う能わず。變を聞くに及び、憤懣し手を以て案を拍

きて絶つ（乾隆『蘇州府志』卷第六十五・人物十九吳江縣・「吳鑑傳附」・十八葉：同治『蘇州府志』（卷一百五・人物三十二・「吳鑑傳附」・三十六葉）も同文）。

「變を聞くに及び、憤懣し手を以て案を拍きて絶つ」の「變」は、乾隆『震澤縣志』で言うように孫兆奎が捕えられたことを指しているとする、潘爾彪は、順治二年八月ころに亡くなったと推測できる。

乾隆『震澤縣志』には、王錫闡<sup>2)</sup>の家に臥病していたと記されている。

〔潘〕爾彪、字は京慧、亦た〔崇禎〕丙子（崇禎九年：一六三六年）の舉人なり。嘗て吳易・〔孫〕兆奎の軍中にあり。〔孫〕兆奎 執わるの時、〔潘〕爾彪 王錫闡の家に臥病す。變を聞くに及び、牀上より躍起し、將に鬪に赴く者の若し。〔しかし〕門 閉じ出るを得ず。乃ち室を繞りて疾走し、夜半に至り、手を以て案を撃ち絶す（乾隆『震澤縣志』卷之十八・人物六・節義・「孫兆奎傳附」・六葉）。

なお、同治『蘇州府志』によれば、王錫闡の邸宅は、吳江の西南に位置する震澤鎮にあった。

困亨樓、處士の王錫闡の居る所なり。震澤鎮に在り（同治『蘇州府志』卷第四十八・園林四・震澤縣・國朝・三十八葉）。

潘爾彪が、この震澤鎮にあった王錫闡の困亨樓に病臥していたのかよく分からない。ただ、潘爾彪がここで病臥していたとするならば、五月に蘇州の邸宅が打ち壊しにあってから後、吳易・〔孫〕兆奎の軍中で過ごし、病気のため蘇州城の南に位置する震澤鎮に移動し、そこで八月頃に亡くなったと考えられる。

李滴春（李涵春）については、いまのところよく分からない。

- ✓ 1) 康熙五十三年（一七一四）に進呈された『明史藁（明史列傳稿）』（本紀・志・表などが加えられ雍正元年（一七二三）に進呈された『明史藁』の成立前に刻された列傳のみの書物である）には、吳易・孫兆奎などの抵抗運動について、つぎのように述べる。

其の時に起兵し郡縣を旁掠す者に吳易、字は日生、吳江の人なる有り。生れながらに膂力（體力）有り、跡弛不羈（放蕩で拘束を受けない）。崇禎の末、進士と成る（崇禎十六年癸未科（一六四三）三甲一百六十三名の進士）。福王（弘光帝）の時、史可法に揚州に謁ゆ。〔史〕可法 其の才を異とし、職方主事を題授（天子からの任命の許可をあたえる）し、己の監軍と爲す。明年、奉けたる檄もて餉（兵糧）を江南に徴（取り立てる）す。未だ還らざるに揚州 失い、已にして吳江も亦た失う。〔吳〕易 太湖に走り、同邑の舉人の孫兆奎、諸生の沈自駟・〔沈〕自炳、武進の吳福之等と舉兵を謀る。旬日にして千餘人を得て、〔蘇州城の南東、錦溪鎮の南にある〕長白蕩に屯す。旁近の諸縣に出没し道路もて梗（斷絶）を爲す。唐王 之を聞き、兵部右侍郎兼右僉都御史、總督江南諸軍を授く。〔楊〕文聰 「〔吳〕易 斬獲（斬首と俘虜）多し」と奏し、進めて兵部尚書と爲す。魯王も亦た〔吳〕易に兵部侍郎を授け、長興伯に封ず。八月、大兵 至り、〔吳〕易 遂に敗走す。父の〔吳〕承緒・妻の沈及び女 皆な投水して死す。〔沈〕自駟・〔沈〕自炳・〔吳〕福之も亦た焉に死す。〔孫〕兆奎 獲われ、一軍 盡く。明年、〔吳〕易の郷人の周瑞 復た衆を長白蕩に聚め、〔吳〕易を迎えて其の營に入れんとす。八月、事洩れ獲われ、之に死す。〔吳〕福之は、〔吳〕鍾麟の子なり。〔孫〕兆奎 兵の敗れし時、〔吳〕易の妻女の辱めらるるを慮り、其の死するを視て後に行かんとす。故に獲われ、械もて江寧に至り、之に死す（『明史藁（明史列傳稿）』列傳第一百五十三・「楊文聰附」・十六葉～十七葉：雍正元年（一七二三）進呈の『明史藁』も同じ。欽定『明史』（卷二百七十七・列傳第一百六十五・十九葉～二十葉・「楊文聰附」）も、「大兵」を「大清兵」に作る以外は同文）。

さて、『吳城日記』や『蘇城紀變』で揚州の轍を踏むことを恐れたとあるように、揚州でかなりの人たちが殺されたということは、すぐに江南一帯に伝わっている。

『研堂見聞雜記』によれば、

乙酉〔順治二年（弘光元年）〕、端午日、予等競渡（端午に行われるボートレース）を観る。〔そして〕大兵（清朝の軍隊）已に廣陵を屠<sup>は</sup>ふり、二十四橋の明月の地盡く煙燼（灰燼）と成るを知る……（痛史本『研堂見聞雜記』不分卷・一葉・「痛史」第五種所收本・辛亥（一九一一年）十月初版）。

- ✓ 2) <sup>おうしやくせん</sup>王錫闡（字は寅旭、号は曉庵。江蘇震澤鎮の人。明・崇禎元年〔一六二八〕～清・康熙二十一年〔一六八二〕）は、『曉庵新法』（一六六二年自序）で知られる天文学者である。中国・西方を総合した暦法を組織した。暦學の理解において梅文鼎と並び称せられるものの、梅文鼎ほどの影響力はなかった。清・康熙帝御定『曆象考成』が編纂されたとき、王錫闡の説はかなり採用されたという。

顧炎武（字は甬人。顧亭林先生と称せられる。江蘇崑山の人。明・萬曆四十一年（一六一三）～清・康熙二十一年（一六八二）。明・天啓六年（一六二六）の諸生）は、王錫闡を、

……夫れ學は天人を究め、確乎として不拔（『易』乾卦・初九爻辭に「確乎其不可拔、潛龍也（確乎として其れ不可抜く可からざるは、潛龍なり）」）なるは、吾（顧炎武）王寅旭（王錫闡）に如かず……（『亭林文集』卷之六・「廣師」条）。

と評する。

朱彝尊（字は錫鬯、号は竹垞、又の号は醜觚。浙江秀水の人。明・崇禎二年〔一六二九〕～清・康熙四十八年〔一七〇九〕。康熙十八年己未〔一六七九〕博學鴻儒科第一等十七名の進士）の『靜志居詩話』は、王錫闡、字は寅旭、一字は昭冥、吳江の人。

寅旭、羣書を博綜し、尤も歴象の學に精なり。新法を創し日月食を候すること較々前人より密なり。撰に『歷法』・『歷說』・『大統歷啓蒙解圖』・『三辰儀晷』諸書有り。人と爲り耿介拔俗（志を堅持して世間にとらわれない）なり。詩も亦た時習に沿わず（『靜志居詩話』卷二十二・「王錫闡」条）。

という。

さらに、潘耒（字は聖木、号は力田。江蘇吳江の人。明・崇禎元年（一六二八）～清・康熙二年（一六六二）。明の諸生）は、『松陵文獻』（康熙三十二年（一六九三）刻）において、王錫闡をつぎのように述べる。

王錫闡、字は寅旭。〔王〕雲の曾孫なり。生まれながらにして穎異（非常に聰慧）にして、深湛（着実にしっかりした）の思い多し。詩文は峭勁（剛健）にして奇氣有り。博く羣書を極め尤も曆象の學に精なり。明代は大統曆を用いるも、惟だ疇人の子弟のみ之を習う。儒生已に罕に知る者有り。西曆に至れば尤も深奥にして専門の授受に非ざれば、能く通ずる莫し。〔王〕錫闡は、聰悟絶倫にして、西人の書を覽れば、輒ち能く其の法數、并せて法を立つる所以の故を明らかにす。久しくして源底を洞徹（通曉）して、「中曆・西曆は、互いに短長有り」と謂う。乃ち自から新法を創め、用以候日月食頗る前人より密なり。諸々の割圓勾股測量の法は、衆の目眩心迷する所の者なり。〔しかし、王〕錫闡手畫口談すること黑白を指すが如し。毎に言う「坐臥（日常生活）するに、常に一の渾天の前に在りて、日月五星の其の上を錯行（交差しながら規則正しく運行する）する有るが若し。其の精なることは是の如し。著わす所に『曆法』・『歷說』・『大統曆啓蒙』・『圖解』・『三辰儀晷』の諸書あり。曆術に通ずる者、之を視て以て專家の逮はずと爲すなり。人と爲り孤介（一本気で世俗に付和しない）寡合（人と付き合いが少ない）なり。古の衣冠もて、「獨行踽踽」（『詩經』唐風・杕杜に「獨行踽踽（獨り行きて踽踽たり）」）として、時世の一錢（わずかな錢）も用いず。其の志節は、臯羽（謝翱：字は臯羽。福建長溪の人。南宋・淳祐九年（一二四九）～元・元貞元年（一二九五））・所南（鄭所南：名は思肖、字は憶翁、号は所南。原籍は福建連江。南宋・淳祐元年（一二四一）～元・延祐五年（一三一八））の流亞（同じ種類の人物）なり。年五十五にして卒す。子無し（『松陵文獻』第十卷・人物志十・隱逸・「王錫闡」条・十六葉）。

とあり、太倉には五月五日に、「廣陵（揚州）を屠ふた」と伝わっていた。

朱子素（字は九初，号は湛庵。朱纓の孫。世々蘇州嘉定縣城内に居住する。明・崇禎十三年（一六四〇）の諸生）の『嘉定縣乙酉紀事』〔痛史本〕（明季稗史初編本『嘉定屠城紀略』・『東塘日劄』〔荊駝逸史本〕もほぼ同じ）によると、五月十三日に、嘉定に揚州のことが伝わったという。ただし、「揚州 陷ち」と記すのみであるが。

〔順治二年（弘光元年）五月〕十三日、始めて揚州の陷ち、留都 將に守らざらんとす、と聞く（『痛史』第十一種所収本・辛亥（一九一一年）十一月初版『嘉定縣乙酉紀事』一葉）。

浙江の紹興にいた祁彪佳は、『祁忠敏公日記』の「五月十八日」条に揚州のことをつぎのように記している。

〔五月〕十八日……伯調（徐臧：字は伯調，号は歲星堂。浙江山陰の人）云う，史道隣（史可法）揚州に據りて虜（清朝）と相い拒むこと七日。虜（清朝）城を破りて後，殺傷すること甚だ多し。道隣（史可法）<sup>つな</sup>羈ぐ所と爲り，死を求むるも得ず……（『祁忠敏公日記』乙酉日曆・「五月十八日」条・十四葉）。

祁彪佳は、五月十八日に徐臧から揚州のことを聞き、「虜（清朝）城を破りて後，殺傷すること甚だ多し」と記している。

なお、直後の記録ではないが、『南渡錄』では、

揚城 頗る堅なり。督輔の〔史〕可法 <sup>こ</sup>焉に在り。北兵 西北の隅より大炮を以て撃ち破り，遂に城に入る。死する者 甚だ多し……（『南渡錄』卷之六・「弘光元年四月乙亥（二十三日）」条）。

とあり、揚州の「死する者 甚だ多し」と記している。また、黄宗義の『弘光實錄鈔』には、北兵 揚州を破り，大學士の史可法と知府の任民育と諸生の高孝纘・王士秀 之に死す。北兵 遂に其の城を<sup>ほふ</sup>屠る（『弘光實錄鈔』卷四）。

とある。そして、鄒漪の『明季遺聞』には、

〔四月〕二十四日，清兵 揚州を攻む。史可法 之を禦ぎ，<sup>わずか</sup>薄に斬獲する有り。〔清兵〕攻むること益ます急なり。〔史可法〕血奏もて救うを請うも報ぜられず。〔史〕可法 門を開きて出でて戦う。清兵 城を破りて入り，揚州を屠る。〔史〕可法 之に死す（『明季遺聞』卷三・南都・三十七葉～三十八葉）。

という。

したがって、『吳城日記』の「五月二十二日」条で、「揚州の覆轍（失敗した先例）を免れ難きを慮り」と記し、『蘇城紀變』では、「五月十九日」条に、「淮揚（揚州）の轍を蹈まん」と記録していることからすると、この時には蘇州の人たちも、清政権による揚州でかなりの人たちが殺害されたことを聞いていたようだ。

また、南京に入城した清政権の豫王によって五月十五日に出された告知のなかで「大兵の到る處，官員軍民 抗拒して降らざれば，維揚（揚州）を鑒とせよ」とあることも知っていたの

であろう。

この五月十五日に出された告知は、『江南聞見録』によると、つぎのようなものであった。

順治二年五月〔十五〕日、欽命定國大將軍豫王 令旨ありて諭するに南京等處の文武官員軍民等 知悉せよ（了解せよ）、余 奉けたる聖旨もて、大兵を統領し、禍亂（禍害變亂）を勘定（武力で平定する）す。順う者は招撫し、逆らう者は剿除（掃討）す。大兵の至る處、兵 刃を血ぬらず、官員 敕印を責（齎）捧して來り降る。不次（破格）に優擢（昇進）する者 之れ有り、照舊（謂跟原來一樣、沒有變化）に供職（任職）する者 之れ有り。民間 秋毫も犯す無し。產業（財産） 安堵すること故の如し。昨（以前）、大兵 維揚（揚州）に至り、城内の官員軍民 櫻城（籠城）して固く守る。予（豫王） 民命を痛惜（心から惜しむ）し、兵を加えるに忍びず。先ず禍福を將って諄諄と曉諭す。〔そのため〕遲延すること數日なり。官員 抗命（反抗する）に終わる。然る後に城を攻め屠戮し、妻子<sup>とりこ</sup> 俘と爲す。是れ豈に余（豫王）の本懷ならんや〔否、違うのである〕。蓋し已むを得ず之を行なうなり。嗣後、大兵の到る處、官員軍民 抗拒して降らざれば、維揚（揚州）を鑒とせよ。夫れ人は皆な天地の生ずる所なり。逆命の徒 死せんと欲すれば、則ち宜しく自盡（自滅）すべし。何ぞ生靈（人々）に貽累（累を及ぼして巻き添えにする）するを得んや。本朝 天の眷を承け、戦いに遇えば必ず勝ち、城を攻めれば必ず克つ〔「播遷日記」に「不敢自矜（敢えて自から<sup>ほこ</sup>矜らず）」句あり〕。〔このことは〕諒に爾等 之を聞き熟せり。然りと雖も、耀德もて必ず兵を觀<sup>マ</sup>る<sup>マ</sup>。仁義もて招撫（安心して生活できるようにする）す。天時・人事 洞然（はっきり）として鑒とす可し。今、福王 尊號を僭稱し、酒色に沈湎す。僉壬（奸人）を信任し、生民 日々瘁る。文臣 權を弄び、只だ作惡納賄（惡事を働き賄賂を取る）のみを知る。武臣 君に要むるは、惟だ假威（虎の威を借る）して跋扈するを思うのみ。上下 離心（愛想をつかす）し、生民の塗炭 極まれり。予（豫王）の念 此に至り、感嘆して已まず。故に奉天（天命をうける）もて伐罪（人々に害を及ぼした統治者を討伐する）し、民の水火（災難）を救う。合行曉諭（布告して諭す）すべし（「播遷日記」十葉に「咸使聞知（咸な聞知せしむ）」の句がある）（『江南聞見録』「乙酉五月十四日」条）。

①『啓禎記聞録』（「痛史」第十三種所收本・辛亥十一月初版）卷四の「播遷日記」（『江南聞見録』と僅かな文字の異同があるものの同じもの）では、「耀德必觀兵」の「必」字を「不」字に作る。この個所は、『國語』周語上や『史記』周本紀に「先王耀德不觀兵（先王 德を耀して兵を觀ず）」とあるのを踏まえたものであり、また文脈から考えても「不」字に作るのが妥当だと思う。

私（豫王）は、大軍を率いて混乱を平定した。したがってきた者は帰順を許し、逆らった者は掃討した。わが大軍の至るところ、殺戮は起こらず、役人たちは敕印を奉って投降してきた。そのため、破格の拔擢を受ける者もあり、そのままとの官職に任命された者もいる。民間からは、少しも収奪することがなく、人々の財産はもとのように保全した。少し前、わが大軍が

揚州に到着した。すると、城内の役人や軍人や民間人が、揚州城を堅く守った。私（豫王）は、人々の生命を惜しみ、攻撃するのが忍び難かった。そこで、まず禍福をもって諄々と説得した。そのため、攻撃が数日遅れた。ただ城内の役人は、説得を拒むだけであった。そうした後に、揚州城を攻撃し、屠戮し、女性や子供を捕虜とした。こうしたことは、私（豫王）のもとと望んでいたことではない。やむをえず行ったことである。これからは、わが大軍の至るところの役人や軍人や民間人は、抵抗して降伏しないのならば、揚州を鏡とすべきである。人は天と地より生れたものである。天地から生まれさせてもらったという天命に逆らう者は、死のうと思うならば、自分で自分を始末すべきである。なぜに人々にまで累を及ぼしていいのか。わが清政権は、天のご加護をうけ、戦えば必ず勝利し、城を攻めれば必ず落城させる。こうしたことは、皆な聞いてよく知っていることであろう。しかしながら、徳を輝かすだけで、武威を示そうとは考えないし、仁義を用いて招撫（安心して生活できるようにする）したいと思っている。天の時や世間の事など、はっきりと鏡とすべきである。いま、福王は、帝位を詐称し、酒食に溺れている。奸人を信任し、人々は、日々困窮している。文臣は権力をもてあそび、悪事を働き賄賂を取ることを理解している。武臣が、君主に要求するのは、ただ権威を借りて跋扈することだけである。上下は、心をひとつにせず、人々の困難な状態は窮まっている。私（豫王）の思いは、ここにいたって感嘆してやむことがない。そのため、天命をうけて人々に害を及ぼした統治者を討伐し、人々の苦しい状況を救おうとしたのである。ここに布告して諭す、という。

したがって、潘爾彪の行為は、『吳城日記』の筆者などの自分の身の回りのことに汲々としていた人たちにとって、きわめて迷惑なことであった。そのため、潘爾彪と李滴春の家は打ち壊されてしまう。ただ、二人の家が蘇州のどこにあったかは、残念ながら分からない<sup>3)</sup>。

この時、「太尊（知府の尊稱）の陳師泰 即ち朱もて撤兵を示し、以て衆心を安んず」（『吳城日記』）とか、「本府 急ぎ解兵（解除武装）すと出示（告示）し、以て之を慰め、乃ち止む」（『蘇城紀變』）と伝えるように蘇州の知府の陳師泰<sup>4)</sup>は「撤兵」を告示して、民心を納得させる。揚州のようによけいな抵抗運動は行わない、ということを示したと思われる。

なお、すでに検討したが、『蘇城記變』は、知府の陳師泰が民心を納得させたことに続けて、霍撫（霍達）犒軍（軍隊を慰労する）の名に借りて、多く公帑（公金）を取りて以て私橐（私腹）を肥やす。郡守（知府）狡吏の誑を聴きて倉廩（米蔵）を濫發し、以て衙蠹

3) 楊廷樞の蘇州城内の住居については、同治『蘇州府志』によれば、梵門橋（梵門橋弄）にあったという。

楊廷樞の宅は、城西の梵門橋に在り。今に至るに其の地は楊衙前<sup>①</sup>と名づく（同治『蘇州府志』卷第四十五・第宅園林一・吳縣・明・三十六葉）。

①現在、「梵門橋弄」となっている。

梵門橋弄は、蘇州城内北西部の景德路と吳趨路の十字路を吳趨路沿いに南に行った最初の東西方向の左側の通りである。



を潤す。而して防守の重事は絶口（口を閉ざす）して談ぜず（『蘇城紀變』 不分卷・一葉・國學保存會印『國粹叢書』 第三集・光緒三十二年（一九〇六）發行）。

（南明政權の巡撫の霍達は、軍隊を慰勞することを名目にして、国庫を持ち出して私腹を肥やした。知府の陳師泰は、悪賢い胥吏のでたらめを聞いて、米蔵を勝手に開き、役所の貪吏を潤してしまった。そして、蘇州防禦の重要事項は、口を閉ざして言い出さなかった）と述べ、知府の陳師泰が悪賢い胥吏にだまされたことや、蘇州防衛のことはまったく言いださなかった、と伝える。

また、『明季南略』の「〔五月〕十四日乙未」条の附記によれば、南京でも蘇州と似たようなことがあったようだ。ただし、南京では、南京の治安維持にあたっていた京營戎政の忻城伯の趙之龍のほうから揚州の殺戮のことを述べて、人々を納得させている。

附記・・・初め、豫王 師を城外に駐む。趙之龍 之を迎えんと欲するも、百姓 願わず、地に羅拜（取り囲んで拝する）す。〔趙〕之龍 下馬して衆に諭して曰く、「揚州 已に屠らる。若し之を迎えざれば、又た守る能わず、徒だに百姓を殺すのみ。惟だ降旗（降伏の旗）を立てれば、方に保全さる可し」と。衆 已むを得ず之に従う（『明季南略』 卷之四・「十四日乙未」条）。

清政權の豫王が南京城外に駐屯した。南京の治安維持にあたっていた忻城伯の趙之龍は、清政權の豫王を迎え入れようとしたが、人々がそれを願わず、趙之龍を取り囲んで拝した。そこで、趙之龍は、馬から降りて「揚州は屠られた。もしも清軍を迎え入れるのであれば、南京を守りとおすことはできず、むやみに人々が殺されるだけである。ただ降伏の旗を立ててしまうだけで、保全されるのである」と伝えた。人々はやむなくその考えに従った、という。

ちなみに、清軍が長江を渡ってからは、南京に至る都市は、わずかな例外を除いて、すぐに清政權に降伏する。このことを『勦餘雜記』はつぎのようにいう。

・・・〔清朝の軍が長江を渡って〕鎮江 首に降り、四府 遂に勞せずして下る。宜興 稍かに與に相い抗む。獨り江陰のみ死守すること三月、而して後に力竭き城破る。清兵 損傷すること大半なり。今に至るも江陰に言及すれば、尙お爲に咋舌（恐れて声が出ない）

4) 康熙『蘇州府志』によれば、陳師泰は、字は交甫、湖北黃崗の人で、崇禎三年（一六三〇年）の舉人。崇禎十二年から蘇州府知府の任にあった。

陳師泰（泰） 號は徹庵、黃崗人。舉人。甲申十二年（崇禎十二年）任（康熙『蘇州府志』 卷第十六・職官一・「知府」条・五十三葉）。

乾隆『黃岡縣志』によれば、蘇州府知府を辞任してからは、故郷の湖北黃岡で暮らした。

陳師泰、字は交甫、性は端方なり。崇禎（禎）庚午（崇禎三年：一六三〇年）の舉人、累官して蘓（蘇）州知府たり。告歸して隱居して、樂道（喜んで談笑する）・吟詠す。書法に工なり。家 貧しく、問字（教えを請う）する者ありて、餽るに酒を以てすれば、即ち留客（引き留めて客人とする）し談論すること竟日（終日）なり。年八十餘にて卒す（乾隆『黃岡縣志』 卷之十一・人物志・隱逸・明・「陳師泰」条・二十一葉～二十二葉）。

と云う。當時、口號ありて云う、「無錫は一炷の香なり、宜興は一條の鎗なり、江陰は寧ろ死するも肯て降らず、靖江は高高（競い合つて）として跪きて沙灘に在り（砂州）、武進は老婆（妻）を獻げ、還た一個の娘（母親）を貼（つけ）る」と。嗟乎、安んぞ人心を得ること盡く江陰の如くすれば、天下の事 尙お爲す可けんや（『慟餘雜記』 不分卷・「鄭鴻逵」条）。

清朝の軍が長江を渡ると、最初に鎮江が降伏し、蘇州の四府（應天・蘇州・松江・常州）は苦勞しないで下った。常州府の宜興が少し抵抗した。ただ、常州府の江陰が三ヵ月にわたって籠城し、とうとう力尽きて開城した。清朝の軍はおおくの損害をうけた。今になっても、江陰に話が及べば、恐ろしくなり声が出なくなってしまうという。当時、伝えられた俗諺に「無錫は一本の線香が燃え尽きるくらいの時間で降伏し、宜興は一本の鎗だけで抵抗した。江陰は降伏よりも死を選ぶ。靖江は競い合つて砂州にひざまずく（靖江は長江の中州に位置する）。武進は老婆（妻）を捧げるだけでなく娘（母親）までも差し出す」という。はげしく抵抗した江陰のように人々の心を得ていたならば、天下の事は、まだ成すすべがあったのだが、という。

また、こうした事情を江蘇武進の薛案は、つぎのように記す

虜の初めて来るは殺掠（殺戮・掠奪）せざるを以て名と爲す。而れども先ず之を刼（脅迫）し以て屠戮す。[このことは]、維揚（揚州）の兵威（軍事的な威力）もて「吾が鱗に攫る者は必ず死す、餘は固より患うること無し」と謂うが若きなり。故に南京・鎮江・吾が常[州]・蘇[州]・松[江]より直ちに杭州に至るまで勢い破竹の如し。過ぐる所の士民皆だ狂藥を飲むのみならず、狐魅（まどわす）せらる。廉恥 盡喪し、忠義 聞く罔く、恬んじて「中國」の二字と大明の二百八十年の恩澤は何物と爲すかを知らず。此れ予（薛案）の五月二十四日以後に感憤して私に記す所なり（『薛諧孟筆記』 下册・一葉）。

清政権がやってきた当初は、殺戮や掠奪をしないことを標榜していた。しかし最初に之（揚州）を脅かし殺戮を行なった。このことは、揚州での軍事的な威力でもって、「我が軍の逆鱗にふれるものは必ず死す。しかし、その他は憂慮することはない」、と言うようなものであった。そのために、南京・鎮江や吾が常州や・蘇州・松江よりまっすぐ杭州にいたるまで清政権の勢いは破竹の勢いであった。清政権の軍が通り過ぎるところは、おかしな薬を飲んだだけではなく、すっかり魅入られてしまったのである。廉恥は失われ、忠義というものは聞かれない。すっかり慣らされてしまって、「中國」の二字と明朝の二百八十年の恩沢は、どのようなものであったかが分からなくなってしまった。これは、予（薛案）の五月二十四日以後に憤慨して私的に記すところである、という。

（つづく）

補注)

乾隆『蘇州府志』は、欽定『明史』・『明末忠烈紀實』・「家傳」などを利用して、楊廷樞の伝記をつぎのように伝える。

楊廷樞、字は維斗。孝子〔楊〕大濬の子。崇禎庚午（崇禎三年：一六三〇）の郷試第一に擧げらる。諸生と爲りてより即ち文章・氣節を以て重名を負う。應社を吳中に倡え、太倉の張溥・張采等の諸名流と經を分かちて課を立て、漢唐以下諸儒の義疏傳説を集め、其の源流得失を辨ず。文章を爲すに、必ず經義に傳（依附）し、力めて世俗の詭譎（虚妄）の習わしを矯む。四方の學者 奉じて楷模（模範）と爲す。〔そして〕其の居る所の皋里に因りて皋里先生と稱さる。領解（郷試に合格）の後、聲譽益々盛にして、門弟子の著録する者二千人なり。初め周順昌 逮（逮捕）され、〔楊〕廷樞 身ずから之を左右し、幾んど禍を被らんとす。甲申（崇禎十七年：一六四四）、變を聞き、北向して慟哭し、死を以て殉ぜんことを誓う。福王 立ち、書を執政に貽る。言う所の十事は、皆天下の大計なり。奄黨の阮大鍼なる者、崇禎の時に廢されて金陵に居れり。復社の士「南都防亂揭」を爲りて之を討つ。〔阮〕大鍼 使を遣りて〔楊〕廷樞に求解（解除を求める）す。〔楊〕廷樞 拒みて納めず。是に至りて〔阮〕大鍼 方に志を得て、宿怨（舊恨）を修めんと欲す。御史の王實鼎 〔阮〕大鍼の意に阿り、「復社渠魁」疏を上つる。〔そして〕専ら〔楊〕廷樞を指して將に大獄に構（誣陷）せんとす。會たま南都破れ、事 解（止む）するを得。乙酉（順治二年：一六四五）の後、鄧尉山に隱居し、復た城市に入らず。丁亥（順治四年：一六四七）四月、蘇松提督の吳勝兆 反す。之が運籌を爲す者の戴之儔は、〔楊〕廷樞の門人なり。事 敗れ、〔楊〕廷樞に連なり執えらる。舟中に於いて絶命詞十二首を賦し、衣幅を裂きて遺書を作り、自から其の後に題して曰く、「吾 少きより書を読み、文信國（文天祥）の人と爲りを慕う。今日の事は乃ち其の志なり」と。五月朔、巡撫の土國寶 蘆墟泗州寺に會鞠（立ち合って取り調べる）す。〔楊〕廷樞 南向して廷立す。〔土〕國寶 好言して相い慰め、易服（同治『蘇州府志』は、「易服」を「薙髮」に作る）を命ず。〔楊〕廷樞 終りまで屈せず。乃ち之を殺す。刑に臨みて大呼して曰く、「生れて大明の人と爲り」。刑を行なう者 急ぎて刃を揮い、首 地に墮つるも、復た曰く、「死しては大明の鬼と爲らん」と。時に年五十三。門人 私に「忠文先生」と諡す『明史』・『明末忠烈紀實』・「家傳」合纂す（乾隆『蘇州府志』卷第五十四・人物八吳縣・明・十三葉～十四葉）。

①『明諡紀彙編』や『弇山堂別集』（卷七十一・諡法紀二・二字諡・「忠文」条）によると、「忠文」は、「臨患不忘國、勤學好問（患に臨みて國を忘れず、學に勤めて問（教えを請う）を好む）」（『明諡紀彙編』）とある。宋では、「范鎮」・「張叔夜」・「宋喬年」・「李彥穎」・「王十朋」・「黃裳」・「徐誼」・「蔣重珍」などに、明では「王禕」や「李時勉」などに贈られている。

楊廷樞、字は維斗、楊大濬の子である。崇禎三年（一六三〇）の郷試で解元となった<sup>註a)</sup>。諸生となつてから、文章と氣節で名望を得た。應社を蘇州に提唱し、太倉の張溥・張采などの名士と經書を分担して課目を立て、漢唐以下の諸儒の經書解釈を集めて、その由来や良し悪しをはっきりさせた。文章を書くにあたって、經書に依拠し、世俗の虚妄の習わしを矯正した。四方の読書人は楊廷樞を手本とした。そして、その住んでいる「皋里」にちなんで「皋里先生」と称された。舉人となつてからは、名声がますます大きくなり、弟子として認められるものが二千人もいた。天啓六年（一六二六）に周順昌が宦官派に逮捕されると、楊廷樞は、みずから対処しようとして、禍を被りそうになった。甲申（崇禎十七年：一六四四）に、北京が李自成によって陥落したことを聞き、北に向かつて慟哭し、死を以て明朝に殉じることを誓った。南京で福王朱由崧が即位することになり、政權担当者に書簡を送った。そこで述べられた十条は、すべて天下の大計であつた。宦官派の阮大鍼は、崇禎年間に失脚して南京にいた。楊廷樞たちが主催していた復社の人たちは、「南都防亂揭」というものを書き、阮大鍼を攻撃した。阮大鍼は、使者をおくって攻撃を止めてもらうよう求めた。楊廷樞は、それを拒否して認めなかった。福王朱由崧が即位することになり、即位にあたって助力した阮大鍼は、力を得て、それまでの怨みを晴らそうとした。御史の王實鼎は、阮大鍼にへつらい、「復社渠魁」疏を奏上した。そして、その疏は楊廷樞のことを批判し、疑獄事件に陥れようとした。ちょうど、南京の福王政權が崩壊したため、事はそのままになった<sup>註b)</sup>。順治二年（一六四五）以後、蘇州郊外の鄧尉山に隱棲して、街には入らなかつた。順治四年（一六四七）四月に、蘇松提督の吳勝兆が清政權を裏切つて反旗をひるがえした。そのはかりごとに預かつた戴之儔は、楊廷樞の門人であつた。吳勝兆の叛乱が鎮圧され、楊廷樞はそれに連座して捕えられた。護送される舟中で「絶命詞」十二首を詠み、襟を裂いて遺書を書いた。その最後

に、「私は若いときから書物を読み、文天祥の人となりを慕っていた。今日の事は、その志すところである」とした。五月一日、清政権の巡撫の土國寶は、蘆墟の泗洲寺で楊廷樞を皆が立会いのもとで取り調べた。楊廷樞は、南に向かって立ちあがたままであった。巡撫の土國寶は、言葉巧みに慰めて、衣服を明のものから清のもの（薙髪）に変更するように命じた。楊廷樞は、最後まで屈しなかった。そこで処刑されることになった。刑が執行される時、大声で「生れて大明の人と爲り」とさげんだ。執行する人は、いそいで刀をふるい、首が地面に落ちるときに、また「死しては大明の鬼と爲らん」といった。時に五十三歳であった。門人たちは、「忠文先生」という諡を私的に贈った、という。

また、乾隆『吳江縣志』には、つぎのようにいう。

楊廷樞、字は維斗、吳縣の人なり。崇禎庚午（崇禎三年：一六三〇）の郷試の第一に擧げらる。順治二年（一六四五）、大兵 蘇州に下り、〔楊〕廷樞 鄧尉山<sup>①</sup>に走避す。後、蘆墟の費氏に寓す。時に四方の弄兵（挙兵して乱を起こす）する者 紛起す。而して〔楊〕廷樞 重望を負い、咸な之を指目す。巡撫の土國寶 師を蘆墟に駐め、人を遣りて〔楊〕廷樞を執え、薙髪を命ず。〔楊廷樞は〕従わず。三たび之に諭するも、卒（最後まで）屈せず。繼ぐるに慢罵（あざけり罵る）を以てす。乃ち之を泗洲寺橋に殺す。首 墜つるも、罵聲 猶厲し。其の門人の迮紹原 其の屍を購いて葬る〔明史〕に本づく<sup>②</sup>。蘆墟の人 爲めに神主を寺廬に置く。乾隆十年（一七四五）、吳江の知縣の丁元正<sup>③</sup> 特祠を建て之を祀らんことを詳請（事情を詳細に報告して願い出る）す（乾隆『吳江縣志』卷之三十三・人物十三・寓賢・明・「楊廷樞」・三十九葉）。

①光緒『蘇州府志』に「鄧尉山は〔蘇州〕府の西南六十里、錦峯山の西南に在り。相い傳うるに漢に鄧尉有りて此に隠す、と」（光緒『蘇州府志』卷第六・山一・二十二葉）。

②『明史』に「〔楊〕廷樞聞變、走避之鄧尉山中。久之、四方弄兵者羣起、廷樞負重名、咸指目廷樞。當事者執廷樞、好言慰之。廷樞慢罵不已、殺之蘆墟泗洲寺。首已墮、聲從項中出、益厲。門人迮紹原購其屍葬焉」（『明史』卷二百六十七・列傳第一百五十五・徐汧）条）。

③同治『蘇州府志』に「丁元正、字は一峰。〔湖南〕衡陽の人なり。乾隆八年（一七四三）、選貢より吳江知縣に任ぜらる」（同治『蘇州府志』卷第七十二・名宦五・吳江縣・本朝・「丁元正」・四十一葉）。

④乾隆『吳江縣志』に「楊忠文祠は、明の節士の楊廷樞を祀る、蘆墟泗洲寺の東に在り。乾隆九年（一七四四） 建つ、知縣の丁元正 記あり。有司 以春秋の二仲（中間の月）の上戌日（上旬の戌日）を以て官を分ちて祭を致す。〔乾隆〕十二年（一七四七）より始めて祭品（祭具） 捐備す（乾隆『吳江縣志』卷之七・壇廟祠・十葉）。

楊廷樞、字は維斗、吳縣の人である。崇禎三年（一六三〇）の郷試で解元となった。順治二年（一六四五）、清政権の軍が蘇州にやってきたため、楊廷樞は鄧尉山に避難した。その後、吳江の蘆墟の費氏のところに滞在した（乾隆『吳江縣志』は、『明史』にもとづいたというものの、この「後寓吳江蘆墟費氏」という記述は見当たらない）。当時、四方で挙兵して乱を起こす者が多くあらわれた。楊廷樞は、名声があったため、皆が注目していた。清政権の巡撫の土國寶が吳江の蘆墟に軍を留め、人を派遣して楊廷樞を捕らえ、薙髪するように命じた。楊廷樞は、その命令にしたがわなかった。三度も命じたが、最後まで屈しなかった。そしてあざけり罵った。そこで、吳江の泗洲寺の橋で殺害した。首が落とされても、罵る声は激しかったという。門人の迮紹原が楊廷樞のなきがらを購って、葬った。乾隆十年（一七四五）に、吳江の知縣の丁元正が特祠を建設して祀ることを詳請（事情を詳細に報告して願い出る）した、という。

以上からすると、楊廷樞の事跡としては、つぎのようなことが挙げられる。

◎天啓六年（一六二六）に周順昌が宦官派に逮捕されることに端を発する開讀の變があり、楊廷樞は、みずから対策を講じようとして、禍を被りそうになる。

◎崇禎三年（一六三〇）の郷試で解元となる。文章と気節で名望を得て、應社を蘇州に提唱し、經書によって八股文を書き、門人が多かった。

◎「南都防亂揭」で阮大鍼を攻撃。そのため、福王政権下で疑獄事件に巻き込まれそうになる。

◎順治二年（一六四五）以後、蘇州郊外の鄧尉山に隠棲したもの、門人が反清運動にかかわったため連座して逮捕される。護送される舟中で「絶命辭」十二首を書き処刑される。

注 a)

楊廷樞にとっては、二度目になる崇禎七年甲戌科（一六三四）の會試の時のこととして、『復社紀略』にすぎのようなことが記されている。

……湛持（文震孟）の職に赴かんとするの時、郡紳 徐九一（徐汧）の止水に修餞す。天如（張溥）

文（文震孟）に謂いて曰く、「明年の會場の同考は、公（文震孟） 必ず壓簾（正考官）たらん。今、海内の舉士の會元たるに愧じざる者は、惟だ陳大士（陳際泰）暨び楊維斗（楊廷樞）の兩人なるのみ。幸いに意を留めよ」と。湛持（文震孟） 曰く、天下の士 大士（陳際泰）の文を讀みて巍科（合格）を取る者は、凡そ幾ばくなるかを知らず。而して大士（陳際泰） 久しく[科挙に] 困しむ。吾（文震孟）

此の番に當に之を夾袋中に收めん」と。天如（張溥） 轉じて項水心（項煜）に語けて曰く、「然らば則ち維斗（楊廷樞）は乃ち公（項煜）の責なり」と。水心（項煜）も亦た首肯す。天如（張溥） 又た曰く、吳鍾巒 久しく海内の師範たり。此の番 此れをして釋褐（進士及第）せしめざる可からず」と。兩人 唯唯たり。闔に入る比、湛持（文震孟） 壓簾（正考官）たり。覓て大士（陳際泰）の卷を得、袖にして水心（項煜）に示して曰く、「昔 老社長（大先輩）たり、今 老門生たり」と。水心（項煜）

狡たり。會元は己の房より出ださんと欲す。乃ち一卷を持して湛持（文震孟）に示して曰く、已に維斗（楊廷樞）の卷を得たり。大士（陳際泰）・維斗（楊廷樞）と吾が黨の交情 少しも軒輊（輕重・優劣）ある無し。但だ天下に冠冕たらしむるは、其の鄰省よりも、寧ろ吾が郷とするに母らんか」と。湛持（文震孟） 乃ち卷を持して細かに閲て曰く、「誠に維斗（楊廷樞）ならば、焉くんぞ譲らざるを得ん。脱し維斗（楊廷樞）に非ざれば奈何せん」と。水心（項煜） 曰く、「今の場屋中 誰が能く此等の文を作る者ならんや。若し維斗（楊廷樞）に非ざれば、當に吾眼を抉りて、之を國門に懸くべし」と。湛持（文震孟） 其の眞に懇（懇願）するを見て、遂に之を許す。舊例として會元は必ず壓簾（正考官）に讓る、填榜（及第者の姓名を記す）するは末後に在り。時の主司 項（項煜）の卷を注視し、湛持（文震孟）

反って遜謝を爲し、己の卷を出して先ず填し、項（項煜）の卷に冠軍を讓る。拆號（姓名の封を破る）するに及べば、乃ち李青なり。湛持（文震孟） 悲ること甚だし。然れども已に之を如何とする無し。項（項煜）謬して罪を負う。湛持（文震孟） 色を正しくして曰く、「此の舉は惟だ大士（陳際泰）に負くのみならず、并せて天如（張溥）に負けり」と。榜 發し、鍾巒（吳鍾巒）も亦た中式す。同簾（同考官）の薛國觀 出でて體仁（溫體仁）に告げ、具に『國表』の姓氏を以て查對するに、中式する者は多く復社に出るを見る。體仁（溫體仁） 後に科目を廢し、保舉を用いんと欲するは、此れに因る（『復社紀略』卷二）。

崇禎七年甲戌科（一六三四）の會試にあたって、張溥は文震孟と項煜に対して、陳際泰と楊廷樞とに配慮するようにと伝えた。ところが項煜が、楊廷樞の答案を李青のものと間違えてしまい、楊廷樞は中式できなかったというのである。

このことは、当時から江南の受験生たちの間で話題になっていたようで、全祖望（字は紹衣、号は謝山。浙江鄞縣の人。康熙四十四年（一七〇五）～乾隆二十年（一七五五）。乾隆元年丙辰科（一七三六）三甲三十六名の進士）も、当時の諸生の楊秉紘からの伝聞として記している。

天多老人 姓は楊氏、諱は秉紘、字は祁牧、浙[江]の寧波府鄞縣の人、太僕卿[楊] 益美の曾孫なり。……[天多] 老人 最も多學なり。讀書 古人の成見に徇わず、尤も考索（探究）に精し。里中の後輩、遙かに[天多] 老人の杖を曳きて來るを望見すれば、輒ち雜選（人が殺到する）して之を迎え、其の故國（前王朝）の事を談ずるを聴く。滔滔汨汨（滔々と流れる）として、以て異聞を爲す。先公（全祖望の父親：全書） 嘗て[天多] 老人の言を述べ、「初年、[以下のようなことを] 聞く。項仲昭（項煜：字は仲昭、号は水心） 誤りて艾千子（艾南英）の文を抹して自から愧じず、反って之を停科に陥す。又た陳大士（陳際泰）を抑えて李青を進め、妄りに以て楊維斗（楊廷樞）と爲す。賂を嘉定伯（周奎）に行い、再び入闈して、恥を雪ぐを求めるに及び、得る所は又た[貳臣となった] 陳名夏と爲す。輒ち其の面に唾せんことを思う。項[煜] 亡命して慈水に至り、馮氏の園に匿れるに及び、慈人 其の髪を採み、諸を水に投げ、復た提て之に問うて曰く『賊に降りし者は、汝なるか』と。是の如くする三にして死す。是れ生平の一快事なり」と……（『鮎埼亭集』卷第十四・「天多老人墓石志」）。

いまのところ、この崇禎七年甲戌科（一六三四）で楊廷樞が書いた答案は、見いだせない。ただ、始めて参加した崇禎四年辛未科（一六三一）の「君子易事 器之」題の答案は、『可儀堂一百二十名家制義』（卷

三十四・「楊維斗稿」・十八葉～十九葉）に収められている。及第を意識して書かれたためなのかもしれないが、内容については特別の主張が盛り込まれてはいない。正統的な經書理解にしたがって書かれている。この科で及第した楊以任（崇禎四年辛未科（一六三一）三甲一百九十七名の進士）の「君子易事 器之」題（『可儀堂一百二十名家制義』卷三十四・「楊維節稿」・七十四葉～七十五葉）の答案と比較しても内容については、際立った変化はないように思われる。

ここから項煜が取り違えたことを推測してみると、崇禎七年甲戌科（一六三四）の會試においても楊廷樞は内容的には正統的な經書理解による八股文を書いたため、李青と区別がつかなかったのかもしれない。さらに言う、楊廷樞の八股文の評判が高かったために、多くの受験生が楊廷樞の書くような文体で八股文を書いたため判断しにくかったかもしれない。もっとも、これは『復社紀略』などが伝えるようなことが実際にあったという前提のうえであるが。

なお、楊廷樞は、崇禎三年庚午科（一六三〇）應天鄉試で解元になってから、

崇禎四年辛未科（一六三一）

崇禎七年甲戌科（一六三四）

崇禎十年丁未科（一六三七）

崇禎十三年庚辰科（一六四〇）

崇禎十六年癸未科（一六四三）

の五科の會試に参加したと思われるが、最後まで舉人のままであった。

注 b)

『南渡錄』によると、「御史の王實鼎」ではなく、「安遠侯の柳祚昌」としているが、崇禎十七年十月二十一日に、安遠侯の柳祚昌が福王政權のもとで詹事府少詹事翰林院侍讀學士となっていた徐汧（字は九一、号は勿齋・觀隅・二株園。江蘇長洲の人。明・萬曆二十五年（一五九七）～弘光元年（清・順治二年：一六四五）。崇禎元年戊辰科（一六二八）の三甲一百四十二名の進士）を弾劾したことが記されている。その文章のなかで、「至貪至横の舉人」として楊廷樞の名前があがっている。

安遠侯の柳祚昌 疏もて詞臣の徐汧等を許す。允（承認）せず。

〔柳〕祚昌 疏もて言う、皇上の中興は應運（時勢の流れにしたがう）なるに、姦臣 陰かに兩端（どっちつかずの態度）を懷く。誰が朝衣朝冠もて他藩（潞王）に京口の驛前に謁見し、而して偶然（でたらめ）として擁戴せんとする者なりと問へば、詞臣の徐汧なり。〔徐〕汧 自から東林の渠魁・復社の護法を恃（自負）す。狼狽（結託）して相倚るは、則ち復社の凶の張采・華允誠、至貪至横の舉人の楊廷樞有り。鷹犬（走狗となる）たりて先驅するは、則ち極險極狂の監生の顧杲有り。皇上の鼎を金陵に定むるも、彼れ公然（共同）として「討金陵檄」を爲る。云う所は「中原逐鹿、南國指馬、析哀犬羊、分地盜賊」と。是れ何等の語なり。乞う大いに乾斷（帝王の裁決する權力）を奮い、立どころに徐汧を逮（逮捕）し、舉人の楊廷樞・監生の顧杲を革去し、先ず提問（審問）を行なわんことを。〔そして〕、其餘の徒黨、臣の次第（順序を追って）に指參するを容し、恭しみて斧鉞（刑罰）するを請う。疏奏ありて、命じて之を已む（『南渡錄』卷之三・「崇禎十七年」十月丙子（二十一日）」条）。

安遠侯の柳祚昌が、奏上して「皇上（福王弘光帝）が南京で明朝を中興されたのは、時勢の当然によったのであるのに、姦臣はどっちつかずの態度をとっています。朝服を着用して、京口で潞王に拝謁して、でたらめに潞王の推戴しようとしたものは誰かと問えば、詹事府少詹事翰林院侍讀學士の徐汧です。徐汧はみずから東林の渠魁・復社の護法を自負しております。また結託して付き従うのは、復社の凶の張采・華允誠や至貪至横の舉人の楊廷樞です。走狗となって走り回っておりますのは、極險極狂の監生の顧杲です。皇上（福王弘光帝）が南京を都となさったのに、彼らは共同で「討金陵檄」を作りました、そこで『中原逐鹿、南國指馬、析哀犬羊、分地盜賊』と言っております。これはどういう意味でしょうか。皇上（福王弘光帝）がご決断になって、すぐに徐汧を逮捕し、舉人の楊廷樞・監生の顧杲を除き去り、まず審問を行ない、その他の徒黨については、臣（柳祚昌）が次々と弾劾するのを認めになり、刑罰を加えていただくことを願います」という。この疏文は、提出されたものの、認められなかった、という。

このことは、祁彪佳の『祁忠敏公日記』にも記録されている。

〔崇禎十七年〕十一月初一日、邇來（近頃）、時局の諸君〔潞王などの〕他藩を擁戴するを以て諸君子

の罪と爲すこと多し。而して安遠侯の柳祚昌 遂に此れを以て徐九一（徐汧）・楊維斗（楊廷樞）の諸君子を參す……（『祁忠敏公日記』日曆・甲申歲・「崇禎十七年十一月初一日」条・四十七葉）。

この頃、政局を担当している諸君は、福王弘光帝の代わりに潞王などの諸王を推戴しようとしていたということをもって諸君子の罪状としていることが多い。安遠侯の柳祚昌もこのことを用いて徐汧や楊廷樞などの諸君子を弾劾した、という。

この事をめぐって、福王政権の実力者の馬士英（字は瑤草。貴州貴陽（貴州衛）の人。萬曆十九年（一五九一）～順治三年（一六四六）。萬曆四十七年己未科（一六一九）二甲十九名の進士）の姻戚であった楊文驄と徐汧たちを助けようとした楊補との間につぎのようなことがあったと、徐汧の子の徐枋（字は昭法、号は俟齋、別号は秦餘山人。江蘇長洲の人。明・天啓二年（一六二二）～清・康熙三十三年（一六九四）。崇禎十五年（一六四二）の舉人）が伝える。

楊無補 名は補、其の先は江西清江の人なり。父の潤 始めて吳に徙り、遂に吳人と爲る。……崇禎の初め、禮部尚書の董其昌・徵君の陳繼儒 一代風流の冠爲り。而して文相國震孟（文震孟）・姚宮詹學士希孟（姚希孟） 天下の重望（崇高な聲望）を負う。皆な詩文を以て無補（楊補）を推許（推奨して称賛する）し、呼びて小友と爲す。是に於いて無補（楊補）の名 一時に重んぜられ、都下を傾動（震動）す。館閣（翰林院）の諸公 之と友と爲らざる者無し。而して同里の徐文靖公（徐汧）と 尤も善しと云う。貴陽の楊文驄は、名士なり。書畫を善くし、詩を能くし、其の才を自負し、一世（天下）を遺忽（輕視）するも、顧だ獨り無補（楊補）を重んず……甲申（崇禎十七年：一六四四年）五月、北都の變を聞き、遂に吳門に歸り、鄧尉山に隱居す。時に崇禎十七年なり。南都 再建し、柄國の諸公 舊遊多し。屢しば之に一出を趣すも、終に應ぜず。……時に賊臣 文靖公（徐汧）を搆（誣告して罪に陥れる）すること甚だ急なり。而して楊文驄 柄國なる者の至親（親戚）爲り。武部郎に官たりて、貴<sup>とうと</sup>ばれて用事（仕事する）、言う所は當を柄國なる者に得ざるは無し。[そこで]無補（楊補）曰く、「天下 文章聲氣を以て君を推すこと三十年に<sup>なんなん</sup>垂とす。天下の交りて君を重んずる所以の者は、君の能く善類（善良な人・有徳の士）を<sup>たす</sup>右け、正人に附するを以てなり。君 柄國なる者に於いて至親（親戚）爲り。君の言は當を得ざる者無し。天下 徐公（徐汧）の天下蒼生の望みを<sup>お</sup>負うを聞かざるは莫し。天下 方に之が相と爲りて、以て大業を<sup>たす</sup>佐くを倚望（依頼して敬慕する）す。君 能く言うの地に居る。而して推轂（薦舉）を爲さず。天下 故に失望す。今、事は急なり。君 固より何を以て天下に謝せん」と。語 未だ卒らざるに、[楊]文驄 曰く、「子（楊補）の某（楊文驄）を責めるは是なり。子（楊補）の言を<sup>とりた</sup>徴て、吾（楊文驄）已に之を相君（宰相）に謁（請求）す。[しかし]此れ相君（宰相）の意に非ず、尋（探求）して當に解すべきのみ」と。是に於いて[楊補は]即ち金陵を出で歸る……（『居易堂集』卷十二・傳・「楊無補傳」）。